

乳頭は外形が円柱状であるが、その固有層乳頭は、外側に 10 個前後の板状のヒダが突出しサボテン状を呈していた。ワオキツネザル糸状乳頭の固有層乳頭は 13~18 個の円錐形乳頭が環状配列し、舌根に近いほど小型化していた。茸状乳頭は外形が半球状であるが、その固有層乳頭は、外側に 12~14 個の板状のヒダが突出しサボテン状を呈していた。

今回観察した 3 種霊長類の糸状乳頭の固有層乳頭は、個数は異なるがいずれも環状配列を示したことから、環状配列は霊長類共通の形態と考える。茸状乳頭の固有層乳頭は、新世界ザルのコモリスザルと原猿のワオキツネザルがサボテン状を示し、この様相が一部の食虫目やウサギ目のものと極めて類似していることから、旧世界ザルのニホンザルと比べ、原始形態を留めていると考える。

計画 7-1

ニホンザルにおける採食行動の発達

上野有理 (京都大・霊長研)

ニホンザルはどのように食物レパートリーを身につけていくのだろうか。ニホンザルのように季節・生息地にわたり幅広い食性をもつ種においては、その過程に社会的学習が関与すると有利だと考えられている。そこで、本研究ではとくに社会的影響に着目し、ニホンザルが食物レパートリーを身につけていく過程について検討することを目的とする。今年度は、乳幼児における採食行動とそのさいみられる他個体との関わりについて明らかにするため、縦断的調査をおこなった。

調査地は京都嵐山岩田山自然遊園とし、昨年度から観察をおこなっている嵐山 E 群出自の乳幼児 4 個体 (1998 年生まれ雌 2 個体、1999 年生まれ雌 2 個体)、およびそれぞれの母親個体を観察対象とした。

結果、乳幼児個体において「採食個体をじっと見る」、「採食個体の鼻面をかく」などの行動が頻繁に観察された。これらの行動はオトナ (母親) 個体ではほとんどみられず、乳幼児に固有の行動と考えられた。観察期間中、対象の乳幼児個体はまだ試行錯誤の時期にあったと考えられることから、これらは食物レパートリーを身につけていくのにかかわる行動の 1 つと考えられた。

計画 7-2

白神山地山麓に生息するニホンザルの遊動：個体レベルの遊動パターンの解明

揚妻直樹 (北海道大・北方生物圏フィールド科学センター・苫小牧研究林)

白神山地山麓の秋田県八森町において、6 頭のサルの遊動様式をラジオテレメトリー法により調査した。調査は 2000 年 2 月、3 月、6 月、10-12 月、2001 年 3 月に各月 3-7 日ずつ行った。

①群れサイズが 2-30 頭の TK 群にはメス 2 頭とオス 1 頭に発信機がついており、この 3 頭は多くの場合お互いに近い場所に滞在し、同方向に移動していた。ただし、6 月に遊動域を大きく移動させた時期には、メス 1 頭が他個体と別に遊動したと思われる日があった。調査期間を通じて特定された TK 群の遊動域面積は約 12km²であった。

②群れサイズが数頭の IC 群 (メス単独でも観察されている) にはメス 1 頭に発信機がつけられていた。このメスの電波は 6 月までしか取れなかったが、2 月・3 月・6 月の遊動域は約